
星の海の物語

聖夜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の海の物語

【Nコード】

N9688L

【作者名】

聖夜竜

【あらすじ】

いつもと変わらない平穏な一日。

ある日、古手梨花が祭具殿の周りを掃除していると、空の上から謎の装置が神社の裏山に墜落した。

昭和58年にはまだ存在しない機械を弄くっていると、梨花の目の前で未知なるゲートが開く。

ゲートの力によって梨花と羽入は雛見沢とは別の新たな世界へと転送されてしまう。

クロードとレナと共に梨花は、広大な星の海を渡る旅に出る――

! ! !

プロローグくひぐらしく (前書き)

初めまして、月城 槐です。

この度、自分が執筆する『魔法少女リリカルなのはく黒き孤高の破壊神く』がストーリーの展開に行き詰まったため、兼ねてから温めていたこちらの小説を投稿したいと思います。

なお、作者の都合により、更新は完全にランダムとなります。

二次創作が嫌いな方、ご都合主義が嫌いな方、スターオーシャンが嫌いな方は、速やかに戻る事をお勧めします。

プロローグくひぐらしく

漂流するは私という個体

漂流するは私の輩

何処に？ 百年という長い時の狭間、永遠の海底

何故に？ それこそ運命の悪戯に違いない

闇に覆われた星の海には天井などなく限りは無い

未だ見ぬ外の世界を星の大海と喻えるならば

小さな海底を泳ぐ私を掬い取るものが何なのか、魚の私にはわかるはずもない

私は初めて海底から上がったとき、あんなにも見たかった井戸の外の世界が、真っ暗で寂しい万華鏡なのだと知りました。

F r e d e r i c a B e r n k a s t e l

昭和58年6月 雛見沢 古手神社

綿流しも近いある日、私は神社の掃除をしていた。

そう、この時までにはいつもと変わらない平穏な一日だった。

仲間が凶行に及ぶこともなく、間違いなくサイコロの数字は1から変わりつつある。

それは百年の旅で一度も起きなかった奇跡。

けれども、サイコロの出目が6になることはなかった。

「みい。これで終わりなのです」

私は掃除用のモップを置き、ここで一息入れる。

ふと、社の方を一瞥すると、角の生えた巫女がこちらを見て微笑んでいた。

「梨花、お疲れ様なのです」

この巫女は羽入という名前で、雛見沢の守り神こと、オヤシロさまと呼ばれる存在。

長い百年を越えて、もはや思い出すことも出来ないくらい長い時間を、私はこの羽入と共に人生を繰り返してきた。

羽入は私がこの世に生まれ落ちてから、親よりもずっと一緒にいてくれた存在だ。

その姿は私にしか見えない、人ならざる者、そして――。

死ぬたびに私は羽入の不思議な力によって、前の人生の記憶を受け継いだまま、何度も新しい人生をやり直してきたのだ。

「…これも巫女の仕事よ。それより、珍しいじゃない」

私はそう言って羽入の傍に歩み寄った。

「てっきり、あんたのことだからストーキングでもしてるのかって思ってたわ」

「あうあう、酷いのです」

ふふっ、慌ててるわね。

私はフツとほくそ笑み、上空を見上げる。

すると、突如空が光ったかと思うと、裏の山に何かが墜落した。

墜落時の衝撃は凄まじい。

大地が悲鳴を上げて震える。

墜落した場所から少し離れているとはいえ、私の足元も大きく揺れ動く。

「…何なのよ、いったい…」

しかしすぐに揺れは収まり、私は気になって墜落現場に向かう。

「……なによ、これ？」

墜落現場には、雛見沢では見たこともないガラクタがあった。

黒色のカプセル上の箱で、最初は冷蔵庫か何かと思ったけど、今の日本の科学技術ではこんなものを見たことがない。

とすれば、この箱は何なのだろう。

私がしばらく思考していると、ふと羽入の姿が視界に入る。

「あんた……また変なアイテムを持ってきたんじゃないでしょうね？」

頬を引き付けさせながら、私は羽入を見る。

何せ羽入は神様だ。

時間を巻き戻すことも停止させることも、人の頭上に雷を落下させることもできるくらいだ。

空の上から未知なる物体を墜落させるなど、多分雑作もないのだろう。

「あああう、それは僕の力とは関係ないですよ」

しかし羽入も焦った表情で私に言い返すところ、どうやら嘘は付いてないようだ。

そういえば私は、いつか見た世界で『恋を叶える縁結びの勾玉』を

巡り、部活メンバーや大人達と争奪戦を繰り広げたことがある。

あの時のことを考えると、これにも何か不思議な力があるのかもしれない。

そう考えた時だった。

ブワツと強い風が吹いたかと思うと、私の目の前で奇妙な現象が生じていた。

水面に向かって小石を投げたように、その場所だけが奇妙に歪んでいる。

「ちょっと…これはどういうこと…？」

私は直ぐ様、隣であうあう言ってる羽入を見る。

「あうあう、僕にもわからないのですよ」

まったく、羽入はこういう時に使えない奴だ。

とは言っても、これが危険だということは火を見るより明らかだ。

今までどの世界でも起きなかったイレギュラー。

それはいま、私と羽入を呑み込むように――。

……え？ 呑み込む？

私が背後に振り返ると、それが私達を吸い込むのは同じタイミングだった。

しまった……羽入に気を取られていたせいかな、完全に油断してしまった。

私の足が地面を離れ、近くにあったモップ共々、私と羽入はその歪みの中へと誘われた。

「このバカ神！ どうしてこういう時に限って使えないのよ！ ケジメとして、今日の晩御飯は激辛キムチ、デザートには唐辛子入りシュークリームだからね！！」

……まあ、晩御飯が食べれたらだけど。

「あうあうあうあうー！！！！？」

それを聞いた羽入は、千切れんばかりに首を横に振る。

ああ、駄目なのね……

この間にも私の意識は朦朧としてきた。

この感覚を、私は知っている。

そう、幾度となく繰り返されてきた古手梨花の死期。

今度こそは、仲間と一緒に運命を打ち破ると信じていたのに……

私は——油断していたの……？

そこで、私の意識は途絶えた。

プロローグとスターオーシャン（前書き）

スターオーシャンsideのプロローグは、ゲームをやったことのある人は分かるかもしれませんが、ゲームとほぼ同じ内容です。

ストーリーは基本的に原作通りですが、多少オリジナル要素を含みます。

プロローグ／スターオーシャン／

広大な外宇宙は

幾億もの人間の様々な夢を受け止め、その上で更に無限の可能性を見せつけていた。

そこには数え切れないほどの夢が広がっている。

無論、その中には悪夢も存在する。

セクターⅤで確認された惑星レゾニアの知的生命体たちが地球連邦に宣戦布告し、激しい戦乱の炎が巻き起こった。

宇宙暦342年

惑星レゾニアとの会戦を、戦艦カルナスによって勝利に導き、栄養指揮賞を受賞する。

宇宙暦346年

辺境の未開惑星ロークで発生した謎のウイルス事件を解決し、レゾニアを背後で操っていた惑星ファージェットの指導者、『ジエ・リヴオース』の陰謀を阻止。

その功績を称えられ、38歳という異例の若さで提督に昇格する。

僕は…そんな父さんのことを誰よりも尊敬していた。

銀河連邦の士官というのが立派な職業だということもわかっている。
でも僕は僕だ。

銀河連邦の英雄、『ロニキス・J・ケニー』提督の息子というだけの人形じゃない。

だけど、僕は今――

ここにいる。

未開惑星ミロキニアを探查していた地球連邦のロニキス提督とその息子、『クロード・C・ケニー』少尉。

いつだってどんな場所だって、偉大な父ロニキス提督の名が付いて回った。

周りから期待されて当然だった。

銀河連邦の英雄の息子にして、19歳の若さで少尉にまで昇格した連邦の若き天才。

当然、クロードも期待に応えなければならないことは事実。

そしてクロードが探查中の謎の装置に近付いた時、それは起きた。

『…座標…214…3—68…97—78…1…』

装置のモニター画面が表示され、死んでいたはずの機械に命が宿る。

「な…なんだ!？」

クロードが背後を振り返ると、先刻まではなかった紫色のブラックホールのような空間の歪みが生じていた。

それは近くにいたクロードを呑み込む。

「くそっ！」

『ゲート…開…きま…す』

ようやく異変に気付いたのか、ロニキス提督と部下がワープホールの発生した場所を一瞥する。

しかし時は既に遅く、クロードはワープホールに呑み込まれ……消えた。

「き…消えた…」

「クロード！」

クロードが消えた場所に近付こうとするロニキス提督を、部下が必死に止める。

「提督!! 危険です！」

するとロニキス提督はクロードが消えた辺りの空間を見つめながら、悲しげにぼつり呟いた。

「…わたしの、わたしのせいだ…」

くクロードsideく

「僕は…そうだ、ミロキニアの探査を…そして光に包まれて…」

ワープホールを抜けた先で目覚めると、見知らぬ森が深々と広がっていた。

「どこだ、ここは？」

起き上がって周囲を見渡すも、見知った景色など目に映りはしない。

「父さん！？ みんな！？」

返事はない。

つまり、あの場でワープホールに巻き込まれたのは自分だけなのだろう。

「そうだ！ 通信機！」

とここで、ポケットに通信機を携帯していたことを思い出し、父さんの乗る戦艦カルナスへと通信を送るも……

「ダメだ、反応がない」

いくら操作しても、通信機は正常に作動しなかった。

「どこかに飛ばされたのか……くそっ！」

いやいや待て、僕は何を焦っているんだ？

落ち着け、K O O Lになれ、クロード。

通信機が使えないにしても、地球連邦では恐らく僕の探索が始まっている。

ならば迎えが来るまでの間、僕は僕なりにやるべきことをするしかない。

今はまだ、その『やるべきこと』が何なのかわからないにしても……

「ここでじっとしていても仕方ない。とにかく、ここがどこか確認しなきゃ」

そうだ、今は考えていても仕方ない。

そして僕は前に向かって歩き出した。

僕が飛ばされた場所は、地球では見たこともない深い森だった。

長閑ではあるものの、人工的なものは何一つない。

「この雰囲気からして、未開惑星なのかもしれないな」

仮にこの惑星が未開惑星だとすれば、さすがに軍法会議ものである。

そもそも、今回の件は全て僕に責任がある。

功に焦っていたとはいえ、ちゃんと父さんやみんなの注意を聞いておくべきだった。

軍法会議となると最悪の場合、処分命令が下るだろうし、良くて少尉の地位から降格といったところか。

上空を仰ぎ、この森に問い掛けるように呟いた。

「いったい、ここはどこなんだ？」

プロローグ／スターオーシャン／（後書き）

次回予告

未知との遭遇、畏怖すべきイレギュラー

全ての思考が止まり、未だ知らぬ死の恐怖に怯える

光を以て少女を助け出すその姿は異国の騎士か、それとも勇者か？

次回、『邂逅』

第1話 邂逅（前書き）

この小説は基本的に梨花視点とクロード視点、レナ視点でストーリーが進行します。

第1話 邂逅

（梨花 side）

「どこよ、ここ……」

目が覚めた時、私は見たこともない森の中にいた。

目の前には、雛見沢では絶対に生えないであろう立派な大木が聳えている。

その時、近くに倒れていた羽入が起き上がった。

「うぐう……梨花、大丈夫ですか？」

心配して声を掛けてくれた羽入に感謝しつつ、私は周囲を見渡す。

「参ったわね……こんなイレギュラー、百年の中で初めて見たわ」

目に映る景色は生まれ住んでいた雛見沢ではない。

それどころか、ここが日本なのかも疑いたくなる。

確かに、私が変わり映えのしない日常に飽きていたのは否定しない。

だからといって、これは非日常どころの話じゃない。

まさか、サイコロを何度も振る権利すらも奪われてしまうとは思ってもみなかった。

運命のサイコロを振り、そのまま勢いのあまり遙か彼方へと飛んで
いってしまったかのような悪夢。

落ち着け、K O O Lになれ、古手梨花。

大凶に選ばれた者は素晴らしい人間の証？

そんなの、信じてない。

こういう時こそ、羽入に頼るのよ。

僅かな期待を込め、私は羽入を見る。

「あうあう」

……期待して損した。

羽入は羽入で先程からあうあう言ってるだけ。

まあ、オヤシロさまは雛見沢以外でもこんな感じということだ。

私は呆れたように溜息を吐くと、落ちていたモップを手取る。

と、その時だった。

「危ない！ 後ろ！」

誰かの声が聞こえ、私は急いで背後に振り返る。

「……えっ？」

そこには、猿のような野性的な化け物がこちらに接近していた。

全ての思考が遮断される。

脳からの命令が体に行き届いていない。

理解できる訳がない。

理解もするも何も、何より意味がわからない。

これは……なんだ？

確かに私はイレギュラーを好む。

だけど、さすがにこれはイレギュラーにも程がある。

見たこともない猿が、私に向かって大木の如き腕を振り上げてくる。

その刹那、私は一瞬だけ思考力を取り戻した。

……ああ、私はこれで死ぬのか。

けれど私が死んでも、羽入がいれば私は時間を巻き戻すことで人生をやり直しできる。

『本当にそうか？』

……えっ？

『薄々と気付いているくせに。ここは雛見沢とは違う。ここで死んだ場合、以前のように人生をやり直すことができる保証があるのでしょうか？』

そんな…そんなはず……

ちょっと待って、それじゃあここで死んだ場合、私はどうなるの？

それはわからない。

ここでふと、私はある一つの考えに至る。

もしここで死んでしまった場合、もう二度と仲間たちには会えないのだろうか。

口先の魔術師、前原圭一。

かあいいモードの竜宮レナ。

部長、園崎魅音。

トラップマスター、北条沙都子。

古手梨花と共に、百年という長い時間を過ごした最高の仲間たち。

このメンバーと共に、永遠に繰り返される昭和58年6月を乗り越えようと誓った。

それを、こんな訳のわからない所で壊されてしまう…？

……ああ、そうか。

今までは羽入の力で人生をやり直してきたけど、それは私が死を逃れて再び雛見沢に戻ったという結果でしかない。

死ぬ時のあの、瞼が重くなって眠くなる瞬間。

死ぬ時のあの、寂しくて震える冷たい悪寒。

死ぬ時のあの、私を殺す悪魔のような奴の歪んだ笑み。

死ぬ時のあの、また新しい人生をやり直せるんだという絶対の安心感。

それらは今も鮮明に覚えている。

でも、その後の結果を……

死んだ後どうなるのか、それについては何一つ……知らない。

天国か地獄、或いは冥界と呼ばれる死後の世界に行けるのか。

何も感じることもない常闇、永遠の無へと還るのか。

……わからない。

わかるはずもない。

だって私は死んだにも関わらず、生きているのだから――。

死、それは生命の終わり。

有限という命の灯火が消えるとき。

それが堪らなく、怖い。

死と直面した時になってようやく気付いた。

私は、古手梨花はまだ、死にたくないのだ。

＼クロードside＼

「人だ！ …ん？」

しばらく森の中を歩いていると、ふと少女の姿が目に入った。

小学生くらいの小さな二人の女の子が、凶暴化したモンスターに襲われている。

「危ない！ 後ろ！」

僕が叫ぶと、武器のようなもの……

うわっ、あれはもしかして掃除に使うモップか？

……ともかく、モップを持った少女は今にも泣きそうな表情で震え始めた。

その近くで、モンスターののような角の生えた少女がオロオロしている。

「たっ、助けなきゃ！」

形振り構ってなどいられない。

僕は目の前の少女を助けるため、所持していた携帯兵器『フェイズガン』を構える。

地球連邦から支給される携帯兵器であり、目標の位相を増大させ、対象物を分子レベルから破壊する小型光線銃。

その破壊力は圧倒的だった。

「ふう。何とか間に合ったな」

モンスターは僅か数発の青き閃光によって倒れ、消えた。

（あ！ ……女の子を助けるためとはいえ、咄嗟にフェイズガンを使ってしまった…軽率だったか…）

安心したのも束の間、僕はこの惑星の住人の前でフェイズガンを使用してしまった。

（未開惑星保護条約に引っ掛かるかもしれない。でも、ああしなかったらこの子達は救えなかった。…仕方ないよな）

そこまで考えていると、モップを持った少女が声を漏らした。

「あ…私…」

少女は未だ震えており、その目は驚愕に見開かれている。

（やっぱりフェイズガンを使ってしまったことが原因か…）

無理もないよな。

僕だって目の前でいきなり光を以てモンスターを倒す者が現れたら、このくらいの反応はするさ。

「大丈夫だったかい？ 危ないところだったね。ところで、ちょっと聞きたいんだけど…」

一歩進み出てそう言った時だった。

「…あなた、何者なの？」

モップを持った少女がそう言ったのと同じタイミングで、オロオロしていた少女の背後から、第三者の声が聞こえてきた。

そこにいたのは、青い髪をした可愛い容姿の少女だった。

僅かに握り拳を作っているところを見ると、この少女が僕に警戒心を抱いていることなど容易に想像できた。

（うわぁ…思いつきり警戒されてるなぁ…）

青髪の少女は僕と二人の少女を交互に見つめた後、何処かに走り去

っていった。

「あ！ ちょっと待って…！」

まずい、このままだと僕は間違いなく変に思われる。

誤解を解くために少女を追い掛けるしかない。

しかしここで一つ問題が残る。

この子達をここに置いていく訳にはいかない。

「…君達も一緒に来てくれるかい？」

僕がそう言うと、少女はモップを持ったまま立ち上がった。

「みい…わかりましたのです」

ふう、どうやらこの子は僕の話聞いてくれそうだな。

「よし、行こうか」

僕は後ろで何やら話し合っている二人の少女にそう言った。

（梨花 side）

「あ…私…」

私はたった今、自分の目の前で起きたことが信じられなかった。

この男は何をした？

不思議な形をした拳銃を取り出したかと思うと、拳銃から青い閃光が発射され、私に襲い掛かってきた猿を簡単に倒してしまった。

「大丈夫だったかい？ 危ないところだったね。ところで、ちょっと聞きたいんだけど…」

そう言って、男は私に近付こうとする。

「…あなた、何者なの？」

しかし口から出た本心は、未知の恐怖よりも目の前の男が気になっていた。

この男が気になったのは、どうやら私だけじゃないようね。

私がチラッと背後を見ると、そこには青い髪の少女が恐る恐るといった様子で私達を観察していた。

その少女はこの場の空気に耐えられなくなったのか、私達を置いて走り去っていった。

「あ！ ちょっと待って…！」

男が止めようとするも、少女が立ち止まることはなかった。

ああ、恋愛面で見ればこの男、間違いなく気の強い女の尻に敷かれるタイプね。

「…君達も一緒に来てくれるかい？」

などと思っていると、突然男が話し掛けてきた。

まあ、確かにこの何とも言えない空気に一人ぽつんと残されるのは嫌だけど。

隣で傍観する羽入を横目で見る。

何やらいつも以上にあうあうしているような気もしなくない。

「みい…わかりましたのです」

相棒が使えない以上、ここは私の判断でこの男に付いて行こう。

雛見沢への帰り方を知っているかもしれないしね。

「よし、行こうか」

男はそれを聞いて安心したのか、ゆっくりとした足取りで逃亡した少女の後を追いつけ始めた。

そして私には、先程から羽入のことで気になることがあった。

「…ところで、さっきから変じゃない？」

そう、さっきから羽入の様子が変なのだ。

男の後ろ姿を見つめながら、驚いたような焦ったような表情であう
あう言っている。

「あう…あの人、僕の姿が見えているのです」

「ああそう…えっ？」

ちょっと待て、それはどういうこと？

羽入は私にしか姿が見えないはず。

ならば何故、あの男が羽入の姿を肉眼で確認できるの？

そう言えばあの男、さっき『君達』とはっきり言っていたじゃない
か。

それはつまり、本当に羽入の姿が見えているということなのだろう。

あの男が雛見沢症候群を発症させたとは思えないし、何よりここは
雛見沢じゃない。

となれば、考えられることはただ一つ。

「あんだ…実体化しているでしょ？」

そう、今の羽入は幽体どころかちゃんと姿を現している。

これなら私以外の人間にも羽入の姿は確認できる。

それどころか話すことはもちろん、触ることだって出来てしまうはずだ。

「…どうしますか？ このまま姿を…」

消してしまうと言うのだろう。

その前に、私にちょっとした考えがある。

「待ちなさい、羽入。今さら隠しても遅いわ。あんたはそのまま実体化していなさい」

人に見られてしまった以上、下手に隠そうとすると疑心暗鬼に繋がる恐れがある。

この場所でも残酷な惨劇が起きることなど、私はそんなの望まない。

「…わかりましたのです。ですが、姿を隠したい時は僕の判断で実行するのです」

まあ、羽入がこう言うだろうとはある程度予想できていた。

何故なら…

「ええ、構わないわ。姿を隠していなきゃ、大好きなストーキングができないものね」

そう言って、私はニヤリと笑う。

「あう（梨花）ー！？」

とその時、さっきの男がこちらに振り返った。

「二人とも、早く行くぞ」

「「はい、なのです☆」」

私達は互いに顔を見合わせた後、揃いも揃ってにぱーと笑い、男の
後を追うのだった。

第1話 邂逅（後書き）

次回予告

青き光を以てモンスターを倒し、梨花と羽入を救ったクロード。

三人はそこで村の少女、レナと知り合い、レナにアーリア村を案内してもらうことに。

そこで梨花と羽入は知る。

自分達が500年前の時代からタイムワープしてしまったのだと。

明かされた真実にショックを受けた梨花は、元の時代に帰れる訳がないとクロードに言い張る。

簡単に諦めようとする梨花を見兼ねたクロードは、自分のやるべきことが出来たと梨花に語るのだった。

次回、『やるべきこと』

第2話 やるべきこと

＼クロードside＼

大木近くの森を抜けた先で、先程の女の子が僕達を待っていてくれた。

「すみません、逃げたりして…」

僕達がやって来ると、その少女は申し訳なさそうに頭を下げて謝罪した。

「いや、その…」

何というか、そこまで丁寧に頭を下げられるとこっちが申し訳ない気持ちになるというか……

「あの…わたし、突然のことだったからちょっとびっくりしちゃって」

「はは、怖かったかな？」

頭を掻きながら、僕は少女に笑い掛けた。

「は、はい。少し…」

そう言って、少女はこうなった経緯を話し始めた。

「いつものように神護の森に行っただんですけど、途中、奥の方で物音がしたんです」

物音……きつとフェイズガンのことだな。

「それで急いで行ったら、あなたがモンスターに襲われていた二人の女の子を助けるのが見えて……」

そうか、あの戦いのことも見られていたのか……

「あ、あの……本当にすみませんでした。あなたはただ、この子達を助けていただけだったのに……わたししたら、変な勘違いして……」

「変な勘違い？」

いったい、何のことだろう。

「みいー。ボク達がこの狼さんに襲われていると思ったのですか？」

モップの少女がそう言うと、青髪の少女は恥ずかしそうに顔を赤くする。

「ち、違います！　ただ、その……」

「いいんだよ、別に。それに、君はこうして待っていてくれたじゃない」

そう言うと、少女は思い出したように自分の名前を言った。

「あ、申し遅れました。わたしはレナ、レナ・ランフォードといいます」

そう言えば僕達、まだ自己紹介してなかったっけ。

「あ、僕はクロード。クロード・C・ケニーです。よろしく」

僕もそれに応えて自己紹介する。

「ボクは古手梨花なのです。よろしくなのです。にぱー☆」

すると今度はモップを地面に突き刺してから、梨花ちゃんがにぱーと笑顔で挨拶する。

ここでみんなの視線は、成り行き上、最後の少女へと集中する。

「あああう。ぼぼぼ僕は、は、羽入といいますです。よよ、よろしくお願ひしますなのです！」

三人の視線を受けたためか、羽入ちゃんは吃りながらも必死に挨拶する。

「クス。よろしくお願ひします」

レナは羽入ちゃんの自己紹介を見てクスッと笑った後、僕の方に向き直った。

「ところで…クロード、さん？ さっきこの二人に何か言い掛けてましたけど…」

「あ、そうそう。大したことじゃないんだけどさ…」

そこまで言うと、梨花ちゃんが僕とレナに話し掛けてきた。

どうやら梨花ちゃんも、聞きたいことがあるらしい。

「そうなのです。ボクも二人に聞きたいことがあるのですよ」

僕は頭を掻きながら、梨花ちゃんは後ろに手をやりながら笑って――

「「ここって…どこなのかな（ですか）？」」

と、訊いてみた。

「三人とも、旅の方なんですか？」

神護の森を抜けた先に、レナの住む村があるという。

村まで案内してもらう途中、レナは僕達に色々質問してきた。

「まあ…そうなのかな。梨花ちゃんたちはどうなんだい？」

「みい。ボクと羽入はずっと一緒に旅しているのですよ」

「そっか。まだこんなに子供なのに…すごいんだな、二人は」

しかし、まさか梨花ちゃんたちまでもがこの惑星のことを知らないとは……

「何処からいらしたんです？」

さて、一番聞かれたくない質問がきてしまった。

はっきり言って、回答に困る。

どうやら梨花ちゃんたちの方もそれは同じようだ。

「地球……からなんだ」

でもとりあえず、ここは正直に答える。

言ってみたところで、理解できるとは思えないけど。

「みい。ボク達は雛見沢という村からなのです」

梨花ちゃんたちは雛見沢という村か……

名前からして、何処かの未開惑星にある田舎の村だろうか。

今時掃除洗濯料理その他は全て機械がやってくれるこの時代、かなり古臭い20世紀のモップを持った少女など、歴史関係のテレビ番組でも見たことがない。

だけど、梨花ちゃんたちの着てる服は何となく地球の服と同じような気もするんだよね……気のせいなのかな。

「チキュウ…？ ヒナミザワ…？ 聞いたことないですけど…」

はは、そりゃ知らないよなあ…

「三人の住んでいる所は遠い場所なんですか？」

それにしても、先程からレナは何かと回答に困る質問をしてくる。

名探偵も真っ青なくらい、鋭い洞察力を持っている。

「うん…多分、ものすごく」

「みい。ボクにはわからないのです…」

そう言うのと、レナは感嘆したように僕達を見つめる。

「すごいですね…エル大陸よりも遠いんですか？」

「さ、さあ…？ 遠いんじゃないかな？ 多分」

何せ、宇宙と呼ばれる星の海を渡るのだし。

「大変な旅なんですね…」

そこまで言うと、僕達の前に橋が見えてきた。

「この橋の向こうがアーリア村です」

「へえ…長閑な村なんだな」

地球にはこういう場所、無いからなあ。

自然だって人工的に作られるほど、超科学の発達した惑星なので当然と言えば当然だ。

「でも、いいのかい？　いきなりお邪魔しちゃって…それも三人も…」

一人ならともかく、梨花ちゃんたちまでもとなるとさすがに無理な気もするんだけどね。

「全然構いませんよ。大したおもてなしはできませんけど、どうかいらして下さい」

「…そっか。じゃあお邪魔しちゃう…かな？　ははは」

レナがそう言うのだし、ここはお言葉に甘えさせてもらおう。

そして僕達は橋を渡り、アーリア村へとやって来た。

「知らなかったな…空気にも味があったんだな」

「空気に味…ですか？」

レナはわからないといった表情で首を傾げる。

「うん。僕のいた所は、不味くて汚かった…」

車などの排気ガスなどに汚染された地球の大気に比べて、この惑星は穏やかな大地の香りと暖かさを感じる。

「みい。雛見沢の空気は澄んでいて、とってもキレイキレイなのですよ」

「へえ…梨花ちゃんたちの故郷もアーリア村みたいな場所なのかい？」

そう聞いてみると、梨花ちゃんはアーリア村を見渡しながら考え込む。

「…ちよつと違うのです。雛見沢はここよりもっと田舎なのです」

「…そうなんですか。どっちも大変なんですね」

僕達の故郷について聞いていたレナは、同情したようにそう言った。

「お互いに、ね。でもここは本当に気持ちいい…」

これなら、未開惑星というのも悪くないかな。

「ふふっ、無くなりませんから、心置きなく吸って下さいね」

「ははは」

談笑していると、前を歩いていたレナが僕達に向き直る。

「皆さん、わたしは一旦家に戻ります。すみませんけど、少しの間散歩してもらえますか？」

「うん。わかった」

そう言ってレナは走り出し、途中でこちらに振り返った。

「すぐ戻ってきますから」

笑顔でそう言い残し、レナは行ってしまった。

「何かとんでもないことになっちゃったな。戻る手段を探さなきゃ……」

「……ええ、そうね」

うん、やっぱり梨花ちゃんは賢い……えっ？

「あの……梨花ちゃん？ 何かキャラ変わってない？」

急に大人びた雰囲気になったというか、黒くなったというか。

……これが梨花ちゃんの本性なのだろうか。

「改めて、私は古手梨花よ。どう？ この辺りでお互いのこと、よく知っておいた方がいいんじゃない？」

「そう……だな。とりあえず、橋のところまで行こうか」

さて、この子の口からはどんな話が聞けるのだろうか。

そして、推測から言えることは一つ。

この時の僕はきつと、梨花ちゃんの内面を理解していなかったに違

いない。

（梨花 side）

レナがいない間、私はクロードに全てを話した。

雛見沢のこと、雛見沢症候群のこと、オヤシロさまのこと。

そして、古手梨花のこと……

私が持つ百年分の情報と引き換えに、私はクロードが知っている情報を話してもらった。

そして現在に至る。

「……………」

「……………」

沈黙、ただそれだけ。

その原因としては、あまりにも私達の話が突拍子過ぎたのだろう。

レナという名前の人が他にもいたことに、内心驚いていた私だ。

クロードの口から出た真実は、私の百年という記憶容量では全く理

解できなかった。

未開惑星？ 銀河連邦に地球連邦？ 宇宙暦366年？

訳がわからない。

ちなみに羽入は、先程から放心状態になっている。

無理もないわね。

雛見沢の守り神であるオヤシロさまがああ装置が作り出した『時空転移シールド』によって守るべき雛見沢を離れ、1983年から2452年の世界にタイムワープしてしまったのだから。

私だって、気絶して朝起きたら沙都子がいって、この話が夢物語だったらどれだけいいかとさえ思ったほどだ。

昭和58年6月を乗り越えるどころか、私と羽入は500年以上も時代を乗り越えてしまった。

元の時代に帰れるという保証は一切ない。

最悪も最悪、これが悪夢と言わず何だというのだ。

クロードへのショックも大きかっただろうが、私はもっとかしら。

途方もない長い沈黙を破るのに、私達は結構な時間を費やした。

「…ごめん。梨花ちゃん、羽入ちゃん。いきなりこんなこと話しても、二人にはわからないよな…」

クロードが口を開いたのは、それからしばらく経ったことだった。

「…あなたが謝る必要はないわ。これは私が聞きたかったことだもの」

それから私は、ショックのあまり立ったまま失神している羽入を一瞥する。

「羽入には悪いけど…これは現実として受け止めるしかないわ」

そう、これが幾百もの転生を重ねた結果、私と羽入が巡り着いた最後の世界。

何ともあっけなく終わった百年の旅。

結局、最後まで鷹野が私を殺す理由が何なのか、わからなかったわね。

「…本当にごめん。でも、まだ元の時代に帰れないと決まった訳じゃない」

「…そんなの無理よ。これはもう、決まっていることなのです…」

そう、この世界での私はあまりにも無力だ。

頼れる存在の羽入だって、オヤシロさまの力がどこまで使えるのかもわからない。

暗闇という海底にビーズを落としたようなもの。

もう見付かりっこない。

「…決め付けるのか？　自分がやるべきことを見付けられないまま、ここで帰れないと諦めるのかっ!？」

やるべきことなど、今の私にはどうでもいい。

どうせ、私達は雛見沢には帰れない。

「なら、クロードは自分がやるべきことを見付けたっていうの!？」
「」

「…ああ。僕はたった今、見付けたよ」

静かに、けど力強く頷き、クロードは私をまっすぐ見つめる。

「僕は君達を元の時代に送り届ける。それが僕のやりたいことだよ」

「っ…!!　そんなの…余計なお世話よ!　こんな場所、羽入さえいれば……」

嬉しくないはずがない。

けれど、素直にそれを喜んでしまってもいいの？

帰れると信じて、また駄目だったら…？

それこそ、今度は本当に死ぬだろう。

「…お世話だろうが、お人好しだろうが、これは他の誰でもない、僕自身が決めたことなんだ」

やがて、クロードは静かに言った。

「僕が決めたことに、梨花ちゃんが口を出す権利なんてない」

それは――

「さあ、僕は君を助けると伝えたよ。仲間が待っている大切な場所に帰るんだろう？」

優しさの中に見える真の心の強さ。

圭一のような暖かさ。

今、私は確かにクロードの姿に圭一を重ねている。

その強さは誰よりも頼もしく、私はそんな彼のこと……

「…ありがとうございます、クロード……」

大好きだったのだろう。

＼クロードside＼

梨花ちゃんとの会話も終え、失神していた羽入ちゃんも回復したため、僕達はレナが待つアーリア村へと向かうことになった。

村の中を散歩していると、やたらと僕達に視線が集まる。

その理由は――

「みい。人気者はツライのです。にぱー☆」

「あうあう…人からこんなに見られるの、初めてなのです…」

「まあ、確かに目立つけどさ…」

見たこともない異国の服を着た僕達三人に他ならない。

僕と梨花ちゃんはまだいいんだけど、問題は羽入ちゃんだ。

モンスターのように生えた可愛らしい二本の角、紅白に彩られた日本の伝統、巫女服。

しかも腋が露出しているため、男ならば目のやり場に困る。

はつきり言って、目立ち過ぎている。

そのためか、先程から村人の視線は羽入ちゃんへと注がれていた。

「梨花あ…消えてしまってもいいですか…？」

涙目になって梨花ちゃんの袖を掴む羽入ちゃん。

すると梨花ちゃんはニヤリと笑い、

「ダメよ。ここだと人が見てるでしょ？」

間違いない、梨花ちゃんは確信犯だ。

それもただ、羽入ちゃんを虐めたいというだけの……

「あうあう、最近こんな役割ばかりなのです……」

ははは、まあ虐められる羽入ちゃんも可愛いんだけどね。

そうしている間にも、僕達はアーリア村の最後の民家までやって来た。

恐らくここがレナの家なのだろう。

僕がドアを開けて家の中に入ると、レナが大人の女性と会話していた。

「それで、その人達はどこにいるの？」

「うん、村の中を見てるって……」

とその時、その女性は僕達に気付いたのか、こちらに顔を向けた。

「レナ、ちょっと……」

「えっ？」

するとレナも、玄関の方に視線を送る。

「あのー、すみません…」

「クロードさん！ それに梨花ちゃんに羽入ちゃんも…！ どうしたんですか！？」

驚いたような表情で、レナは僕達を見つめる。

「いや、村の中を散歩してたらここに着いちゃったんだ」

「そうなんですか。びっくりしたあ…」

「まずかったかな？」

するとレナは首を横に振った。

「そんなことはありませんよ」

一方、僕の後ろでは梨花ちゃんが羽入ちゃんを慰めていた。

「羽入、もう大丈夫なのですよ」

「あう…少し恥ずかしかったのです…」

とは言うものの、羽入ちゃんはまだドキドキしているようだ。

まあ、神様って普通、人の目には見えないもんなあ。

梨花ちゃんの話によれば、羽入ちゃんは好物のシュークリームをあげればすぐに機嫌が良くなるらしい。

よし、今度こっそりあげてみようかな。

その間にも、レナは先程の女性に僕達のことを紹介した。

「お母さん、この人達が今話したクロードさん、そして梨花ちゃんと羽入ちゃんよ」

「初めまして、私はレナの母親のウエスタです」

そう言ってウエスタさんは、僕達に挨拶した。

「お母さん、クロードさんが梨花ちゃんたちを助けたのよ」

レナが神護の森でのことを伝えると、ウエスタさんは感心したように僕を見つめる。

「あら、そのなの。子供が危ないところを助けて頂いたそうで…」

「そんな…別に大したことはしてませんから」

そう、子供を助けるのは人として当たり前のことだ。

「いえいえ、こんなに可愛い女の子二人を助けるなんて、立派なことじゃないですか」

「それは…」

別に下心があつた訳じゃないんだけどさ。

「皆さん、お待たせしました。もうわたしの用は済んだので、村の中を案内しますね」

するとレナは玄関まで来て、僕達を案内してくれると申し出た。

「あ、うん。お願いするよ」

はは、これはまた羽入ちゃんが不貞腐れそうだな。

「じゃあ、お母さん。いつてきます」

「はいはい。いつてらっしゃい」

ウェスタさんは玄関まで来て、僕達を見送ってくれた。

「お邪魔しました」

「「お邪魔しましたなのです」」

ウェスタさんにお礼を言い、僕達は家を出た。

「すみません。騒がしい母で」

レナの家を出ると、レナが僕達に謝ってきた。

「はは、気にすることはないよ。ウチの親も似たようなものだから」

騒がしいどころか、退屈そのものを嫌う人だし。

「ボクは母とあまり良い関係じゃなかったので、レナと仲良しのウエスタが羨ましいのですよ」

そう言って、何処か遠くを見つめる梨花ちゃん。

ん、ということは梨花ちゃんは自分の母親とあまり親しくなかったのかな？

「そうなの？」

レナも心配そうな表情で梨花ちゃんに声を掛ける。

「はい。古手家は雛見沢を支配する御三家の一つで、ボクの母は古手家の女王様だったのですよ」

なるほど、梨花ちゃんがさっき話してくれた通り、梨花ちゃんは雛見沢では本当に期待されてきたんだろうな。

偉大な親を持ち、周囲から期待された子、か……

何だろう、梨花ちゃんに妙な親近感を持ってしまうのは。

「すごいじゃない。梨花ちゃんは偉いんですね」

ただ一人、梨花ちゃんのことを知らないレナは、素直に梨花ちゃんを誉め称えた。

「そうなのです。ボクと羽入は雛見沢ではとっても偉いのですよ。にぱー☆」

「クス。じゃあ行きましょうか」

やがてこの話も終わり、僕達はレナの案内で村を回ることにした。

レナがいない間に少し散歩したとはいえ、ちゃんとこの村を見て回るのは初めてだ。

「あつ、こんにちは」

「こんにちは」

四人で村を歩いていると、まず最初に優しそうなおばさんに出会った。

「あら、その人達はレナちゃんのお友達？」

「あ、どうも。クロードと言います」

「古手梨花なのです。こっちは羽入と言いますです」

僕達が挨拶すると、おばさんは何故だか僕を執拗に見つめる。

「あら、可愛いお子さんだこと。それにしても、レナちゃんが彼氏を連れ込むなんてねえ…」

「ち、違います！ そんなんじゃないありませんから！」

レナは否定するも、おばさんは既に行ってしまった後だった。

「もう、おばさんったら…」

（梨花 side）

レナに村を案内された私達は、噴水広場の奥にある民家に入った。

「このウチのお父さんは大工さんなんですよ。今は隣町で大きな仕事をしているらしくて、家にいないことが多いんですよ」

「子供たち二人だけで留守番かい？」

都会からやって来たクロードが驚くのも無理はないわね。

「クロード、ボクも沙都子という親友と二人で暮らしているのですよ」

「二人でって…両親とか身内の人は…？」

私の言葉が気になったのか、クロードが問い掛ける。

「…いないのです。ボクの両親も沙都子の両親も、事故で死んでしまったのです…」

「…ごめん。悪いこと聞いちゃった…」

私達に両親がいないと知り、クロードは申し訳なさそうに頭を下げ

た。

「…あの、その沙都子ちゃんって子、梨花ちゃんがいなくてことは今は一人なんですよね…」

……さすがはレナね。

あっちのレナもそうだったけれど、こっちのレナも洞察力が鋭い。

そう、レナの言う通り、私もずっと沙都子のが気掛かりだった。両親がいなくなってから、長い間ずっと一緒に住んでいた私が別れもなく忽然と消えてしまったのだ。

沙都子にとっては姉である詩音がいるとはいえ、私は一人取り残された沙都子が心配だった。

叔父の鉄平がもし現れたりでもしたら……

などと考えると、私は不安な気持ちで胸が一杯になってしまう。

「…ちよつと可哀想ですよ。沙都子ちゃん、一人で残されて…」

「優しいんだね、レナは」

見ず知らずの沙都子を気遣うレナに、私とクロードは好意を持った。

「そんなことはないですよ」

「みい。レナはとってもいい子なのです」

私が百年の旅で初めて知り合ったレナ・ランフォードと竜宮レナは、きっと同じなのだ。

誰にでも優しくて、好きな相手に自分を合わせようと努力する。

そうでもなければ、この村の人にとって明らかに怪しいはずの私達に、自ら進んで村を案内したりはしなかっただろう。

「「レナお姉ちゃん！」」

すると、レナの周りに二人の子供が近寄ってきた。

「今日もお父さんはお仕事？」

「うん、もう2週間も帰ってきてないの」

この子達を見てると、一緒に暮らし始めた頃の私と沙都子を思い出す。

二人で暮らすということにまだお互いが慣れていなかったあの頃。

あの頃の沙都子は両親が死んだのは自分のせいだと言い、自らの心の殻に閉じ籠ってばかりだった。

「でも大丈夫さ！ 妹はぼくが守るんだ！」

「うん、寂しくないよ。お兄ちゃんもいるし、レナお姉ちゃんも遊んでくれるもん！」

一年間説得し続けた結果、ようやく取り戻した沙都子の笑顔。

両親がいなくても、沙都子はこの二人のように大切な人の帰りをずっと待ち続けてきた。

「今日はお話してくれないの？」

「ごめんね、今日はちょっと忙しいんだ。また今度ね」

必ず帰って来ると信じて疑わない純真な心。

「わかった」

「うん、また今度ね」

だからこそ、この二人も沙都子のように強い心を持っているのだ。

……今度、暇な時にでもこの子達と一緒に遊んであげようかしら。

そして私達は二人の子供と別れ、隣の家以案内された。

家の中では様々な物が売っており、民家というよりは雑貨屋みたいなところだった。

「ここはハーンさんの雑貨屋さんです。みんなの役に立つものを売ってるんですよ」

私達が店内を見ていると、何かいい匂いが私達の鼻腔を刺激した。

「みいー。何だかい匂いがするのです」

「それはハーブの匂いですね」

「ハーブ…？」

レナの説明に、クロードはわからないといった表情で首を傾げる。

「傷を治したりする薬ですよ。旅の必需品じゃないですか」

「そうなんだ。ハーブか…初めて知ったよ」

クロードの一言に、さすがのレナも焦ったようだ。

「知らなかったんですか？」

「うん」

クロードが正直に答えると、レナはしばらく黙った後、こう言った。

「よく今まで無事でしたね」

それは呆れたような驚いたような、複雑な表情だった。

次に私達がやって来たのは、村の西側だった。

村の入口付近を歩いていると、一人の少年が私達に声を掛けてくる。

「レナお姉ちゃん、最近アレンお兄ちゃん来ないね？」

「そうね。どうしたのかしらね？」

レナは澄ました顔でそう言った。

レナのこういう表情を見ると、あのクールでカッコイイ時の竜宮レナを彷彿とさせる。

「レナ、アレンお兄ちゃんて…？」

「え、あの、幼馴染みなんです。隣町の人なんですけど…」

レナの反応を見る限り、恋仲という訳じゃなさそうだ。

アレンね……どんな人なのかしら。

などと考えていると、レナと同じ年くらいの若い娘が声を掛けた。

「あら？ その人達、レナの知り合いだったの？　じゃあ、そっちの人は彼氏？」

この村に来たばかりで、初対面の私から言えることは一つ。

「この人達はお客さんなの！　そんなじゃないんだったら！」

「ふふ、ムキになっちゃって。カワイイんだから」

この女、性格的に鷹野と馬が合いそうね。

「もう！　行きましょう、三人とも」

レナはクロード恋仲説の話題を避けるようにしたらしく、足早に次

の場所に私達を案内した。

いいわね、こういう男と女の修羅場というのは。

何度見ても飽きが来ないわ。

「あう…梨花、ニヤケ過ぎなのです」

などと思っていると、今まで沈黙が続けていた羽入が静かに呟いた。

…どうでもいいんだけど。

いくら人に逢うのが恥ずかしいとはいえ、もう少し目立とうとはしないの…？

くクロードsideく

次に僕達が案内された場所は、二階建ての大きな民家だった。

「ここは最近結婚した夫婦の家なんです。見ている方が恥ずかしくなるくらい仲がいいんです」

「おや、レナちゃん。今日は彼氏と一緒にかい？」

それにしても、村の人達は恋愛的な面でレナをからかうのが好きなのだろうか。

「もう、勘違いしないでください。この人はお客さんです」

そしてその度に、そうじゃないと否定するレナ。

何だろう、この悲しくなってくる気持ち……

「あなた、レナちゃんはどうしてもいい子なの。幸せにしてあげてね……わたしみたいに」

「は、はい……」

そして遂には、既婚者であるエルミアさんにも言われてしまうレナ。

「もう……」

どうやら、レナは村のみんなに否定して回るのに疲れてしまったらしく、最後は少々諦め気味になっていた。

民家を出たところで、僕と梨花ちゃんは無意識に隣の建物を見る。

この村で一番大きな建物で、やはりここが一番気になる僕達であった。

「ここはアーリアの教会です。村の結婚式とかはここでやるんですよ」

なるほど、教会だったのか、どおりで……

「とても真面目な神父様がいらっしゃって、いつもみんなの相談に

のつてくださるんです」

「へえ、立派な人なんだね」

とその時、羽入ちゃんが僕にあることを訊いてきた。

「…教会って何なのですか？」

羽入ちゃんも梨花ちゃんも、揃いも揃って首を傾げている。

そうか、二人は教会なんて知らないのか。

「教会っていうのは、神様にお祈りを捧げる神聖な場所なんだよ」

まあ、僕の知識だとこれ以上詳しいことは話せないだろう。

「神様…神社のようなものですか？」

「うん。日本以外の…つまりアメリカとかの外国だね。君達から見れば、洋式の神社みたいなどころじゃないのかな？」

僕の説明に納得してくれたのか、羽入ちゃんはコクコクと頷いた。

…まあ、宗教的には色々異なるんだけどね。

「あの人は何をしているのですか？」

すると今度は、梨花ちゃんが一番奥にいる神父を見ながら僕に訊いてきた。

「みんなのお祈りを聞き入れて、神様と会話する人だよ」

「みいー。神様とお話しできるのですか？」

そう言うと、梨花ちゃんは驚いた表情をする。

だけど僕からすれば、神様といつも一緒にいる梨花ちゃんの方が驚きなんだけどね。

「うーん、何て言うのかなあ。神様の教えを代弁する、って言えばいいのかな？」

「つまり、ボクと同じ巫女さんなのですね」

「うん。まあ、そんな感じかな」

これは今度、またこの二人に何か聞かれるかもしれない。

そして教会を立ち去る時、僕は静かに覚悟を決めるのだった。

教会、雑貨屋、民家、噴水広場…

この村で見て回れる場所はそう多くない。

けれど、レナと一緒に時間はあっという間に過ぎていった。

第2話 やるべきこと（後書き）

次回予告

——それは、ある意味必然だった。

アーリア村の村長、レジスから告げられたこの世界の真実。

少年は助けを求められるも、今一つ勇気が出せない。

少女は自分の犯した間違いに気付き、少年を叱咤激励する。

二人が共に戦うと誓った時、真の勇者は降臨する——！！！！

次回、『真の勇気を抱きし者』

第3話 真の勇気を抱きし者

レナside

「お母さん、ただいま」

時刻は夕方。

一先ず村巡りも終えて夜も近いということで、私達は一旦私の家に帰ることにした。

「あら、レナ、よかったわ。ちょうど今、支度が終わったところよ」

「支度…って？」

気になって家の中に入ると、テーブルの上にはこれからパーティーでもやるんじゃないかと思ってしまうほど、豪華な料理が山のよう

に並べられていた。

「お母さん、なに、この料理の山は…」

これには私も驚いてしまう。

私達が村を回っている間に、よくこれほどたくさんの料理が作れたわね。

「美味しそうですね？ 母さん、腕によりを掛けて作ったんだから」

「そうじゃなくて！」

お母さんはそう言うけど、さすがにこれは腕によりを掛けたところじゃない。

「なに？ 食べないの？ クロードさん達が旅をしていると聞いたから、いっぱい栄養付けてもらおうと思ったんだけど…」

「それはわかるけど…多すぎない？」

クロードさんならともかく、どう見ても梨花ちゃんたちには食べられない量だ。

「そう？ 若いし、たくさん食べるかなと思って。三人とも、お腹空いてますよね？」

「まあ、それなりに…」

クロードさん達がそう言うなら、まあいいんだけど……

「三人とも、たくさん食べてくださいね」

「は、はい…」

「もう、お母さんたら…」

改めて、お母さんの凄さを思い知った気がする。

（梨花 side）

豪華な夕食会も終えて、私達は二階の部屋に移った。

「みい。お腹がいっぱいになってしまったのです」

「僕もあんなに食べたの久しぶりだ。もう入らないや。ごちそうさま」

クロードはお腹を擦りながらそう言った。

「あう…あんなに食べたのは初めてなのです」

羽入もウェスタにどんどん勧められて、珍しくたくさん食べたようだ。

まあ、実際は殆どクロードが一人で食べたのだけだ。

「無理しないで残してもよかったんですよ。大丈夫ですか？」

「平気なのです。ボクの胃はとっても丈夫なのです」

どこかの誰かさんも、何故だか私のお腹を開腹ばかりするものね。

「もう、お母さんたら作り過ぎよね」

「でもすごく美味しかったのです。ぱちぱちぱち、なのですよ☆」

素直に両手をぱちぱちと叩くと、レナの顔も明るくなった。

「ふふ、お世辞でも嬉しいです。喜んでもらえてよかった」

そう言って、レナは私達に向き直る。

「わたしは下で後片付けを手伝ってきますね。少しの間、二階でゆっくり寛いでいてください」

「はい、なのです」

レナが下に降りた後、私はベッドに腰掛けてクロードを見つめる。

クロードはずっと何かを考えているようだ。

「…ボク達、帰れると思いますか？」

だからこそ、余計に不安な気持ちになってしまう。

「大丈夫だよ。今はまだ帰る方法を探さなきゃいけない段階だけど、いつか絶対に二人を雛見沢に送り届けて見せるよ」

クロードは決意に満ちた表情でそう言って、私と羽入の頭を順番に撫でた。

「あ、おばさん…」

とそこに、後片付けを終えたウエスタがやって来た。

「お味は如何でした？ ちょっと量が多かったかしら？」

「そんなことはないのです。すごく美味しかったです。ごちそうさまなのです」

よかったわ…私達の会話は聞かれてないようね。

「そう？　どういたしまして…」

料理の感想を言うとウェスタは私を疑っているのか、執拗に問い質してきた。

「本当に美味しかった？」

「本当なのです」

「本当に本当？」

「本当に本当なのですよ」

このしつこさ、私の知ってる罪滅し編での竜宮レナに似てなくもない。

レナの母親も、こんな感じの人だったのかしらね。

「…ああ、よかった。勇者様達のお口に合わなかったらどうしよう
とばかり…」

「あの、勇者様って…？」

うっかり言っただけならいいことを言ったのか、ウェスタはしまったという顔で焦り出す。

「お母さん、ただいま」

とその時、下の階からレナの声が聞こえてきた。

ウェスタは慌てて階段を降りると、下の階でレナと話し始めた。

「どどど、どうしよう、レナ」

「どうしたの、お母さん？ そんなに慌てて…」

どうやらレナにも、ウェスタが慌て出した理由がわからないようね。

「だって…」

「だってじゃなくて、どうしたのって聞いているの」

しかしレナは、いつも通り冷静な態度で聞き返す。

「言っちゃった」

「なにを…？」

ウェスタの様子からして、ついとうっかり口が滑った…って感じね。

「勇者様って…」

「えーっ！ 言っちゃったのー？ それであの人達は？」

ウェスタからそのことを聞いたレナまでもが慌てて聞き返した。

「まだよくわかってないみたいだけど…」

…それはお互い様ってところね。

「いったい、何が起きているんだ？」

一通り立ち聞きした後、私達は二人が気になって下へと降りていった。

「いいから、落ち着きなさい。彼らもまだ事態を理解しておらんんじゃない？」

私達が下に降りると、玄関先でウェスタと誰かが会話していた。

「あ、クロードさん…」

レナの声で気付いたのか、長老のような老人は私達の前にやって来た。

「あなた方がクロードさんと梨花さん、羽入さんですか。初めまして、わたしはこの村の長をしております、レジスという者です」

（クロードside）

挨拶も終わり、僕達はテーブルの椅子に座って詳しく話し合うこと

になった。

「神護の森でこの二人を助けて頂いたそうで。異国の方とはいえこの村で起きたこと。村長としても感謝しております」

「いえ…」

そこまで丁寧に言われると、こちらも調子が狂ってしまおう。

「ところで、レナから聞いたのですが、旅をしている途中だそうですな」

「いや、そんな大袈裟なものでもないですけど…」

これはマズイ…

梨花ちゃんもそう思ったのか、夕食時にテーブルの下に置いたモップを、足を使って奥の方へと動かし始めた。

その間にも、レジスさんは話を続ける。

「何処へ行かれるおつもりですか？ クロス王国、それともラクル大陸ですか？」

「あの、それは…その…」

レナの時は何とか上手く誤魔化したものの、この人には嘘が通じそうにないと悟る。

「ここが何処かもわからぬ上に、目的もハッキリしない。妙な旅人

でございますな」

この人が何を言いたいのか、僕にはわからない。

だけど、恐らく……

「なにが言いたいのですか？」

とその時、今まで沈黙を続けていた梨花ちゃんが口を出した。

「…無礼を承知で申し上げます。あなた方は嘘をついていますな」

やはり、見抜かれていたみたいだな。

「あなた方はただの旅人ではありませんまい」

「旅人じゃなかったら何だというの？」

そう言ってレジスさんに言い返す梨花ちゃん表情は、完全に黒い方の梨花ちゃんになっている。

「恐らく異世界の者…あなた方は我々を助けるべく訪れた『光の勇者様と百年の魔女様』でございますよう」

レジスさんの一言に、僕達は内心驚いた。

「ええっ？　ちょっと待ってください、何を根拠に、そんな…」

「根拠なら我々の地方の伝承にこんな言い伝えがあります」

そう言うと、レジスさんはゆつくりと語り始めた。

「汝、異国の服を纏い、海を渡る時空の航海者。光の剣を持つ勇者に侍る百年の魔女は、運命を共にする仲間と共に奇跡の魔法を携え、邪悪なる神の魔の手から人々を救いたもう…と」

…!? それって…

「…ボク達のこと、なのですね？」

全員の視線が梨花ちゃんと僕に向けられる。

「あなた方は異国の服を纏い、光の剣をお持ちじゃ。これ以上どんな理由をお求めになる？」

「そんな…『光の剣』なんて、僕は持っていないせんよ！」

僕がそう告げると、

「そんな…二人を助けた時には、眩い光を放つ武器を使っていたじゃないですか！」

レナは憤慨したように反論する。

「それは…」

言い返すこともできない。

「この人達は違うのでしょうか？」

「嘘よ！ そんなことない！」

レナはテーブルに片手を叩きつけて叫ぶ。

「うむむ…」

この件についてはレジスさんも困っているようだ。

「光の剣に関してはわかります。奇跡の魔法が何なのかはわかりませんけど…でも、だからといって僕と梨花ちゃんが勇者と魔女であるというのは、何かの間違いのような気がします」

「どうしてそんなこと言うんですか？」

僕の言葉を聞いて、レナは鋭い目付きで僕を睨み付ける。

「だって、本当に勇者じゃないんだ。そんな力なんてない。そもそも何が起きているのかもわからないし…いきなり助けろって言われても…」

「…本当に知らないんですか？ ソーサリーグローブのことも、異変のこと…」

レナの悲しげな一言を、僕達は黙って聞くことしかできなかった。

「この村に起きているわけではありません。世界全体に異変が起きているのです」

だけど、本当に何も知らないんだ、僕は……

更に沈黙が続けると、レジスさんが口を開いた。

「本当にご存知ないようすな。ご説明致しましょう」

レジスさんは少し間を開けてから、静かに語り始めた。

「今から3ヶ月前のことです…」

そしてレジスさんの回想が始まった。

（梨花 side）

レジスの話を聞き終えた後も、私達は互いに黙っていた。

ソーサリーグローブという名の隕石が墜落し、やがて魔物が世界中に現れた。

その石がこの星に悪夢の惨劇を齎した全ての厄災の元なら、それを打ち破ることができるのは、運命に導かれた勇者様……この私達しかないということらしい。

「今、世界に異変が起きつつあります。各地で起きている群発地震。モンスターの凶暴化……いずれはこの村にも厄災が降り掛かるでしょう」

「でも…僕は…僕にはそんな力、ないんです…」

クロード…

「厄災を引き起こすような隕石を相手にできる訳がない」

みんなが助けを求めているのに、私達の力じゃあまりにも無力なのだ。

そう、崇殺し編での沙都子のように…

「それではあなた方は、何処からやって来て、何処へ行こうというのです？」

「…それは…うまく説明できません。説明してもわかってもらえるかどうか…」

無理はないわね。

私達のことをちゃんと話したところで、簡単に信じてくれるとは思えなかった。

「ただ言えることは、僕達がここにやって来たのは偶然による事故が原因ということです。そして、何とかして、本来いた場所に戻りたい…それだけなんです」

クロードの意志を聞き、レジスはやがて言った。

「漠然としていてわかり難いですな」

「でも…そうとしか言えません」

ああ、同じなのだ。

私がかつて鷹野と富竹に、二人が崇りに遭って死ぬと告げた時と同じ。

根拠もなくそんなことを漠然と話しても、当然二人がそれを信じることはなかった。

何故そうなるのかという理由を訊かれるだけで、真実を知る私はどう答えばいいのかわからなくて……

「そこまで強弁に否定なさる以上。あなた方の仰有っていることは、きっと真実なのでしょう」

それなのに、レジスは詳しい理由を聞こうともせずに私達を信じてくれた。

「本当に…あなた方は光の勇者様ではないのですな…」

「そんな…」

絶望的な表情で、レナはがっくりと首を下げる。

「すみません。結果的に期待を裏切る形になってしまっ……」

「みい…ごめんなさいなのです…」

私は、それしか言えない自分に腹が立った。

これではまるで、羽入と同じじゃないか。

自分のせいで起きてしまった惨劇に、ただ『ごめんなさい』と謝ることしかできない。

それどころか、私達はこの星の厄災から逃げようとしているのだ。

自分達には関係ないからという理由で、私達は現実から逃げようとしている。

「いや、こちらが勝手に勘違いしただけです。あなた方が気に病むことはありませんまい」

それでもレジスは、こんなにも卑怯な私達に怒りもしない。

「ごめんなさいね…」

ウェスタまでもがそう言うと、突然レナが席を立ち、家を飛び出していった。

「レナ！」

「しばらくそっとしてやってください。あなた方を本当に勇者だと信じていたのでしょうか…なに、そのうち落ち着くと思います」

：ああ、登場人物だけが変わった惨劇のカケラでも見せられているような気持ちになる。

こうやって私は、また他人を絶望の惨劇へと引き込むのね。

なんて情けなく、なんて悔しいのだろう。

「クロードさん、一つお願いがあるのです。できればこの先、あまり勘違いを受けるような行動は慎んで頂きたい」

レナが去った後、レジスは何事もなかったように話を続けた。

「その…光の剣などのことです。先程説明した通り、ソーサリーゲローブは厄災と言われる魔の隕石です。世界各地で絶望という名の闇が溢れているのです」

レジスは椅子から立ち上がると、私達に背を向けて更に続ける。

「そんなところにあなた方のような人が現れたと知れば、少なからず希望を抱いたとしても不思議はありません。レナのように…」

そうね…この星の人達からすれば、私達は光の勇者そのもののね。

「どうせ叶わぬ望みなら、初めから持たぬ方がいい。どうか、お願いします」

こちらに向き直り、レジスは深く頭を下げた。

「…どうせ叶わぬ望みなら、初めから持たぬ方がいい…？ 何よ、それ…」

たった一言、レジスが言ったその言葉に、私はカチンときた。

「私はクロードが異国の勇者だと信じた！ クロードなら、きっと

この運命を壁ごと打ち破ってくれと……」

それに、クロードは橋の上で私に言ってくれた。

自分の『やるべきこと』が見付かったと。

ならば私にだって、やるべきことはある。

「それを羽入みたいに……どうせ叶わないのだから最初から期待するな、ですって!？」

それではまるで、かつての私達と同じじゃないか。

でも、今の私は違う。

奇跡とは、みんなが信じて初めて起こせるものだと、私は仲間たちに教えられた。

だから私も、仲間が団結すれば奇跡は起きると信じている。

ならば私は――

「……今のクロードは確かに光の勇者とは違うかもしれない。けれど、私はそうじゃない」

私が呟いた言葉に、全員が驚いた表情をする。

「……私と羽入がこの世界にやって来たのは、決して偶然じゃなかった。そう、これは運命が導いた必然だったのよ」

サイコロの運命は私達を引き合わせた。

それはクロードとレナだけじゃない。

羽入だって未だ私の影に隠れる傍観者だけど、初めて人前に姿を現してくれた。

「…私にはこれが奇跡だとわかる。でもね、この程度の…この世界の舞台上に立てた程度の奇跡じゃ駄目なの!!!」

そう言って私は、未だに隣で燻っているクロードを見る。

「クロード、あなたはどうか？ どうせ自分には奇跡を起こせる力なんてないから、自分には運命に立ち向かう勇気がないから……さっきからそう考えているのよね？」

クロードは何も答えない。

でも、私にはそれだけでわかる。

「…でも僕は…戦うのが怖いんだ」

未だに弱音を吐くクロード。

それは運命に屈していたかつての私。

私は今、過去の自分と向き合っている。

「剣を持つその手が震える？ 生まれてからずっと歩き続けた足が竦む？ この村の空気を吸った胸がざわめく？」

「でも僕は…父さんや母さんのように勇敢だった訳じゃない…周りの奴らはそうやって僕を……」

ああもう、本当にイライラする。

「親が何よ、周囲が何よ!! あなた自身が変われないと諦めていたら、何時まで経っても変わらない!!」

私はクロードの服を掴み、必死に叫ぶ。

「運命と嘆くな! 勇気を持て、クロード・C・ケニー!! 私達はまだ何も終わってもなければ、このカケラのゲーム盤に立ってすらない!」

こういう時、一番頼りになる口先の魔術師よ。

この場限りでいい。

今こそクロードに、戦う勇気を与えてちょうだい。

「戦う前から恐怖を抱いて目の前の敵から逃げようとした、己自身の心の弱さ、心の恥じを知れ!!」

——前原圭一直伝の魂の叫びで、私はその懦弱な心を打ち破った。

「我が名は百年の時を生きる奇跡の魔女、古手梨花。我が名においてクロード、あなたを光の勇者と認めるわ」

「梨花ちゃん…!?!」

私はテーブルの下に置いていたモップを取り出し、それを高らかに掲げて見せる。

「クロード・C・ケニー、私もあなたと共に戦おう。その先の未来に至れるまで、闇を光に変えるために……！」

私はクロードに手を差し出す。

さあ、後はあなた自身が決めることよ。

あなたの勇気を私に見せてちょうだい。

「戦おう、惨劇と！ 抗おう、運命に！」

それが私の、古手梨花のやるべきことなのだから――

（クロードside）

梨花ちゃんの想いを聞き、僕は自分が間違っていたのだと、ようやく気付かされた。

偉大な父からの期待、期待に応えられないと思い込んでいた劣等感。

僕を英雄の息子として特別扱いしようとする周囲からの対応。

何をしても、自分は結局父さんの息子というだけの人形でしかない。

……けれど、今は違う。

「…すみません、レジスさん。その願いはお断りします」

「クロードさん、何を…!？」

レジスさんは驚きを隠せずに僕を見る。

「確かに…僕には勇者と呼ばれるほどの力なんて、ないのかもしれない…」

——力がある者を勇者と呼ぶのか？

「自分が元の場所に帰ればいい。この星でのことなんか、僕には関係ないと心の何処かで思ってしまった…」

——英知ある者を勇者と呼ぶのか？

————違う。

「…だけど、厄災と戦う勇氣なら持てます。梨花ちゃんと一緒なら、ソーサリーグローブだって、運命だって打ち破ってみせる!!」

僕もまた、梨花ちゃんと同じようにフェイズガンを高らかに掲げる。

——真の勇者とは、勇氣ある者のことを呼ぶのだ。

僕と梨花ちゃんは互いに頷いた後、その場で高らかと宣言する。

「僕が（私が）、光の勇者様だ（奇跡の魔女よ）！！」

——この日、アーリア村に光の勇者と奇跡の魔女が降臨した。

第3話 真の勇気を抱きし者（後書き）

次回予告

レジスの家で一夜を開けた梨花たちは、鉦山の町サルバに行くことに。

しかし手掛かりもなくサルバから帰って来た梨花たちを待っていたのは、レナが幼馴染みのアレンに誘拐されたというところでもない話だった。

囚われたレナを救出するため、梨花とクロードはアレンの屋敷に乗り込む。

そこで梨花たちを待っていたのは、明らかに様子がおかしいアレンの豹変した姿だった。

次回、『囚われのレナ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9688/>

星の海の物語

2011年8月1日19時25分発行